



発行  
NPO法人いわむら一斎塾  
事務局 江戸城下町の館  
〒509-7403  
岐阜県恵那市岩村町317  
TEL 0573-43-5087

口を以てこの行ないを誘ふこと勿れ。耳を以て人の言を聞くこと勿れ。

晩録一七〇条

釈意  
自身の口で自らの行為行動をわらくいうものでない。又自身の耳で人の言を聞いてはいけないと一斎先生は説く。

「心」(魂と一体の心)の大切さ、「心」でうけとめる大切さ。言い換えれば、「良心」(良知)でうけとめ思慮する大切さ。  
今世相をみるにこの教えの逆の行為行動が多い。自らの都合と勝手、自らの保身の為に、口先で事々に言をなし、耳先のみで人の言を聞き判断する。その「心」なき「誠」なき「魂」を忘れた行為行動が世を乱し、不祥事を生む。  
大自然に向い、世に對し、自らの良知に向い、誠をもって反省し改め、人の言をうけとめ、学びて自らに問うべきである。  
「良心にてらして」、「良心の呵責」、忘却された今日であればこそ、その再生を。  
(徳増省允)

### 一斎と方谷

作家 童門冬二



わたしはかつて東京都庁に勤め五十一歳で辞めたが、四十五歳か

ら六年間は、政策案の形成責任者の立場にあつた。いまにして痛恨極まりないのだが、当時は佐藤一斎も山田方谷(敬称略)も知らなかつた。したがって一斎先生の書いた『重職心得箇条』も方谷先生の書いた『理財論』の存在も知らない。もしこの二書の存在を知り、熟読玩味していればあのころの仕事のやり方もずいぶん変つていただろうなあ、といまだに悔やまれる。不勉強というのは恐ろしいものだ。両先生の書いたこの二書の中でとくにわたしが心を魅かれるのは、たとえば方谷先生の『理財論』の二条にある、「それ善く天下の事を制する者は、事の外に立

ちて事の内に屈せず。而るにいまの理財者は悉く財の内に屈す」という一言、一斎先生の『重職心得箇条』の六条にある「凡そ物事の内に入ては、大体の中すみ見えず姑(しばらく)く引除て活眼にて惣体(そうたい)之体面を視て中を取るべし」という一文だ。同質の文章だと思ふ。ともに「難問(危機)に面しては、いったんその危機の中から外に出て、全体をみきわめるような態度が必要だ」ということだろう。とくに財政難のときに、フレーム(財政枠)のことばかり考えていると、眼の前のことに眼がくらみ、全体をみる眼を失う。そうなると、結局は危機処理に大きな過ちを犯すことになるということだ。都庁にいたころのわたしは完全に「財の内に屈す」という状況下にあつたと思う。残念だ。これはいまの政府の仕事ぶりや、地方自治体の仕事のやり方についてもいえることである。全体に「財政主導」の傾向が強く、「政策主導」ではない。本来の予算の立て方は、

- ・ 理念あるいは理想を具体化した長期計画を立てる
- ・ その計画の一年分を予算化する
- ・ その一年にやらなければならぬこと、あるいはやりたいことを全部柱立てし、費用を見積

る。このときは、その年にいくら収入があるかは気にしない

- ・ 予算査定の際は、トップ(大臣や首長)が、自分の理想をモノサシとしてその年にやらなければいけないことを優先させる予算額の査定をおこなう。
- ・ したがって、はじめから「今年予算要求は昨年の一割減にしてくれ」などというやり方は本来は間違いだ
- ・ そんな予算の立て方をすれば結局は財の内に屈し、夢も理想も消えてしまう

というものである。つまり政策が先に歩いて、財政が後から歩いていく。しかしいまは全体に財政が先に歩いて、政策が後から従っていく。これはまさしく「財の内に屈する」現象だ。一斎先生やその門に学んだ方谷先生は常に「政策主導」を唱えておられたのだ。

### 現代の若者の心に響く 佐藤一斎の『言志四録』

福岡工業大学  
社会環境学部教授  
上寺康司

私は、大学で教育学・人間学関係の講義科目やゼミナールを担当している。ここ十年以上にわたつて、私は自らの担当するすべての講義やゼミナールの中に佐藤一斎

の『言志四録』から教育思想・学習思想に関連する内容の条文を随所に引用し、講義の内容に張りをもたせている。『言志四録』には、今日の教育や学習の要諦が盛り込まれているからである。大学一年生には、大学生としての人間の在り方生き方を指導する必須科目『人間形成』で、『言志四録』の内容を引用して、人間としての在り方生き方を指導している。

私自身が驚くことがある。それは、佐藤一斎の『言志四録』の条文が若き学生の心に響き、多くの学生が感動を覚え、自らの日々の在り方生き方の糧にしていることとする感想を述べていることである。今からおよそ二百年から百六十年ほど前に著された書物の内容が、現代の若者の心に響き、自己改善・自己成長の兆しを示す力を持っているのである。

佐藤一斎の『言志四録』にみる教えや学びに関する条文には、今日の人間の在り方生き方に役に立つ内容が数多くあるが、その中でも私が講義の中で必ず取りあげ、学生に対して暗誦するように繰り返し強調しているのが、次にあげる四つの条文である。『言志四録』に親しんでいらっしやる方々には周知の条文である。四つの条文は、充実した日々の生活を送るための

人間としての在り方生き方、特に心の持ち方、心の環境づくりの示唆を与えてくれる。

一つが『言志後録』第三十三条「春風を以て人に接し、秋霜を以て自ら肅む。」である。この条文は、多くの学生にインパクトを与えており、白人「以春風接人、以秋霜自肅」を携帯電話の待ち受け画面に設定している学生もいる。この条文は、人間の在り方生き方のすべてを物語っている。他者に対しては、春風のように穏やかにさわやかに、寛容の精神をもつて接し、自らに対しては秋の冷たい、踏むと痛い霜を踏みしめていくかのようになり、自らには厳しく、慎みの精神をもつて自らを磨き続ける。簡潔に述べれば人に対するやさしさと自らに対する厳しさを謳った条文である。他者に対して寛容の精神を發揮することは、他者にやさしくすることであり、やさしくすることは他者のために具体的に行動できる力量を備えていることである。そのためには人間的に強くなければならぬのである。

さて、人間的に強くなるためにはどうすればよいのか。すなわち人間力を高めるべく自らを磨き続けるにはどうすればよいのか。これらの問いに答えてくれるのが、二つ目にあがる『言志晩録』第二

六三条「多少の人事は皆是れ学なり。」である。自らの周りのあらゆる人・物・事、すなわち自らの環境を、自らを人間的に磨き成長させてくれる「学問」（「学び」の対象）ととらえるのである。自らの環境から学ぶ姿勢は、自らの環境に対する感謝の心を抱かせる。それによって自らの環境に対する不平等感を抱かなくなる。自らの環境に対する積極的な精神が涵養されるとともに、前向きな姿勢が創出される。人生即学び、生活即学びの生き方ができるようになる。

この「多少の人事は皆是れ学なり。」を箴言として待望していた学生は多く、「あ、これだな。」「自分の目の前がぱつと開けた。」「自宅の机の前に張って、毎日眺めています。」といった感想を述べてくれる。

自らの環境のあらゆるものから学ぶにあたっては、「学び」（気づき）の瞬間を見逃してはならない。自分を成長させてくれる「学び」の瞬間を「ここだな！」とつかむことが必要となる。この「学び」の瞬間を見逃さないための工夫を示しているのが、三つ目にあがる『言志後録』第三十四条「克己の工夫は一呼吸の間に在り。」である。「学び」の瞬間から即実行、即自己改善である。

「学び」の瞬間をつかむためには「現代」の瞬間瞬間を善処することが肝要であり、そのためには心を「現在只今」の状態にして、自らの環境に向き合うことが必要となる。そこで四つ目にあがる『言志晩録』第一二五条「心は現在なるを要す。」を肝に銘じておくことが必要となる。

私は、以上あげた『言志四録』の四つの条文を、卒業生に贈るやさやかな記念品であるノートの裏表紙に記している。先日、ひよっこりと私の研究室を訪れた卒業生が「多少の人事は皆是れ学なり。」の一文が、日々の仕事の遂行に際して、私に勇気と力を与えてくれます。」と語っていた。おそらくはその卒業生の心の中で『言志四録』が結晶化しているのである。



## 一斎塾への応援歌

田中吉徳

子どもの頃に岩村の近くに住んでいたこと、父親の勤めの大半がこの町だったことから、かねてより、この町の「一斎塾」の活動に目をつけ、公開されている情報等に目を通しながら、地道な活動の積み重ねと広まりに関心を持ってきました。長年、音楽教育に関わってきた私の経験から、一斎の教えを親しみやすい歌曲にして歌っていたら、と考えた次第です。

しかし、新曲の定着率は極めて低いもので、細心の注意を払い、歌詞が分かりやすく旋律的なものを選び、昨年は「清きものは」を日本的な和声を使った作曲を得意とする西宮市在住の中西覚さんに作曲していただき、続いて今年「順境は春の如し」を中津川市在住で、ピアノと声楽の指導で高い評価があり、作曲も手がける渡辺洋子さんに作曲していただき、続いて、私のやっている「日本の歌を歌う会」や高齢者大学の講座等でも、歌詞の解説をしながら歌っていただいています。

【清きものは】

色の清きものは観る可く、声の清きものは聴く可く、水の清きものは嗽く可く、風の清きものは当る可く、味の清きものは嗜む可く、臭の清きものは臭ぐ可きなり。凡そ清きものは皆、以て我が心を洗うに足る。(言志叢録二八二) 春風を以て人に接し、秋霜を以て自ら肅む。(言志後録三三)

【順境は春の如し】

順境は春の如し、出遊して花を観る。逆境は冬の如し、堅臥して雪を見る。春は固より楽しむべきも、冬もまた悪しからず。(言志後録八六)

歌は人の感情を豊かにし、温和な気持ち育てるだけでなく、旋律を伴った歌詞は生涯に亘って記憶されることから、まず、この二つの歌を多くの方に、気軽に歌っていただき、一斎の教えの真意をご理解いただければと思います。

「いわむら一斎塾報」を読み、日頃の生活と一斎の教えとを対比させながら、実践的な話し合いがされている姿に感銘しましたが、このような歌が「一斎塾」の活動へのささやかな応援歌になればありがたいと考えています。

前記の歌が練習できるホームページは <http://yoshi.enat.jp/> を開いて左上にある「佐藤一斎の…」をクリック。

## 「嚶鳴フォーラム」に参加して

副理事長 鈴木木隆一

東海市の呼び掛けに応え、全国から十三の市長が東京へ集結し、各ふるさとの先人の教えを地域活性化にどのように取り組み、活かしているかを紹介されました。三百人を超す参加者は熱心に耳を傾け感銘を受けながら多くのことを学び合うことが出来ました。

去る七月二十八日(土)、ANAコンチネンタルホテル東京で世の中は参議院議員選挙を翌日に控え、少子高齢化などさまざまな問題を抱えながらも地方分権が進む今の時代に、ふるさとの先人を活かしたまちづくり、人づくり、心そだてを進めている自治体が協力し合い、歴史を活かしたふるさとづくりを、『情報として全国に発信』していくことを目的として「嚶鳴フォーラム」が開催されました。

「嚶鳴」とは、中国の古典「詩経」のなかに出て来る言葉で、「鳥が仲間を求めて鳴き交う」という意味が転じて、「仲間を求めてお互いに切磋琢磨しながら、共に学び共に成長し合う」ことです。

東海市出身の江戸時代中期の儒学者・細井平洲が江戸で開いた私塾が「嚶鳴館」であったことから

この名称にもなりました。

参加した自治体とゆかりの先人を紹介しますと、岩手県釜石市の大島高任(鉱山学者・事業家)、山形県米沢市の上杉鷹山(藩主)、長野市松代の佐久間象山(思想家・兵学者)、富山県高岡市の前田利長(加賀藩主)、神奈川県小田原市の二宮尊徳(農政家・思想家)、恵那市岩村の佐藤一斎(儒学者)、東海市の細井平洲、滋賀県高島市の中江藤樹(陽明学者)、岡山市高梁市の山田方谷(儒学者)、愛媛県宇和島市の伊達宗城(藩主)、大分県竹田市の広瀬武夫(海軍軍人)、佐賀県多久市の多久茂文(領主)、長崎県対馬市の雨森芳洲(儒学者)です。

おなじみの作家・童門冬二氏のコーディネートのもと、各市長はスクリーンに映し出されるふるさとの先人の業績や訓えを、市政や市民生活にどのように活かしているかを誇らしく熱く語り合いました。可知恵那市長は絵本「おじいちゃんとおぼく」を高く掲げながら、生涯学習の原点でもある「三学戒」を紹介され、それを活かしたまちづくりの推進を披露されました。

「各地から持ち寄った情報を、お互いに他の地域へも発信し、活かしてもらうよう働きかけて行くこ

う」と童門氏はまとめられ、参加者一人一人の心にその火種をもらい散会しました。

翌二十九日(日)は会場を小田原市へ移し、二宮尊徳記念館の見学と講話、全日空会長・大橋洋治氏と童門氏の講演を拝聴し充実した二日間を終えることができました。

私たちの一齋塾と志を同じくする人や団体が全国各地でがんばっておられるのを肌で感じ大いに意を強くし、来年開催予定の高島市での再会を約し帰途につきました。

### これからの人生のために

今井真澄

女であり母であり妻であり嫁であり下田歌子「女子の修養」に書かれている全ての章にあてはまる私。初めて読んだ時言いたい事はわかるけれど自分として理解するのはむづかしかった。今回原稿を書くためもう一度読んでみた。やっぱりむづかしい。その中でも共感出来る文章があった。母親の心得、家族での教育です。子供を溺愛しすぎると我儘となり手がつけられなくなる。愛情に溺れた子育て以上に子供をダメにするものはない。私は心が打たれました。わかっていても我儘を聞いてしまう子供の言いたい放題やりたい放題

ダメな母親の見本となってしまう。これから先の人生せつかくいい本とめぐり合えたのだからダメな人生を歩まない様悩んだ時はこの本を読み返し少しでも自分らしく生きられる事を望んでいます。現代語訳をしてくれた中学生の子たちも今はまだ理解出来ない事だらけだと思っけれどこれから先の人生、歌子女士の教えを学んだ事がきつと役に立つ時がくると思う。中学生という

大切な時期にとってもいい勉強をさせてもらい、親としてありがたく思います。



### 「いわむら一齋塾」がめざすもの

二十一世紀を生き抜く教養豊かな人材と指導者を養成するために、郷土が生んだ幕末の偉大な碩学佐藤一齋翁の教えを基本理念として、広く高い見地から多様な学習と修養の場作りに関する事業を行い、子どもから大人まで幅広い層に至るまでの「人づくり」「心そだて」及びそれを活かしたまちづくりの推進に寄与することを目的としています。

## トピックス

### (1) 漢字文化講演会

日時 十一月十七日(土) 午後一時三十分より  
会場 恵那市中央図書館  
演題 詩人としての佐藤一齋  
講師 石川忠久先生(前二松学舎大学長・財団法人斯文会理事長)  
定員 五十名

### (2) 「三学戒」額装を恵那市へ寄贈

市内の公共施設、学校等五十カ所へ、会員の神谷慎軒さん(書家)揮毫の三学戒を寄贈しました。B3サイズで和紙に印刷されたものです。  
ご希望の方には有料でお分けします。お問い合わせ下さい。

### (3) 「ザ・縁日」に協賛

岩村商工会青年部主催のザ・縁日が八月十三日(月)岩邑小学校で開催され、当塾も佐藤一齋や言志四録のパネル展示とクイズで協賛しました。クイズは佐藤一齋について二十問出題しましたが、十九問正解の方が五名ありました。特製Tシャツや当塾発行の図書、特製携帯電話ストラップなど計二十名の方に賞品を授与しました。

## 一齋塾が紹介する書籍

- ・名言録集 五百円
- ・おじいちゃんとおぼく 千五十円
- ・言志四録抄日捲り 七百元
- ・大人の寺子屋 六百元
- ・重職心得箇条 八百元
- ・生き方ルネッサンス 二百六十円
- ・佐藤一齋の思想 二百六十円
- ・佐藤一齋 三百円
- ・女子の修養 七百元



## あとがき

塾報第三号をお届けします。第三号は第十一回言志祭に合わせた発行となりました。童門先生、上寺先生、田中先生、又、息子さんが女子の修養に携わられた今井さんにはお忙しい中寄稿して頂きありがとうございます。紙面をもって御礼申し上げます。NPO法人一齋塾も徐々に広く皆さんに注目され夏の「ザ・縁日」のクイズには子供から大人の方達迄多数のご応募ありがとうございました。今後共ご協力よろしくお願ひ申し上げます。次回の発行は翌年四月の予定です。